

日本のオペラ2021

石田麻子

1. 2021年はどんな年だったのか

世界中が突然コロナ禍に見舞われた2020年。発生から一年以上の月日が経ってもなお、我々はパンデミックへの対応を強いられた。舞台芸術の世界では、新規感染者数の増加、緊急事態宣言の発出に伴い、公演中止、延期、計画変更などを余儀なくされていく。あらゆる場面で即時の判断や厳しい対応を迫られる中、根本的な解決策を見いだす間もなく防御一辺倒となり、現場には徒労感が満ちていった。いつ終わるとも知れない、目に見えない脅威との闘いに、創造活動は、その手法やあり方を変えなければならないという状況が続いた。「ウィズコロナ」を見据えて、ワクチン接種の開始に望みを託しつつ、国や地域ごとに対策手法が大きく違うことを実感しながら、現場対応をせざるを得ない。約一年延期したうえでおこなわれた東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会だったが、コロナ対応に伴い、華やかに開催されるはずだったTokyo Tokyo FESTIVAL(2020大会文化プログラム)は、制限に次ぐ制限の中、当初、皆が思い描いた姿とは全く異なる形で実施された。今後、舞台芸術の世界に大きな変化が訪れることを、誰もが覚悟した年だったとも言えるだろう。

1-1. 2020年から続くコロナ禍

2021年のオペラをはじめとする舞台芸術に関わる事柄と政府、東京・大阪を中心とした地域での対応については、本年鑑24ページからの「年表でみる新型コロナウイルス感染症と日本のオペラ界(2021年)」(オペラ研究所編)でまとめている。

刻々と変わる状況に応じて、都道府県単位でのコロナ対策が次々発表される状況だったことが、年表をつうじて改めて記憶に蘇る。目に留まるのは、緊急事態宣言の発出、イベント開催の制限、休業要請など、コロナ禍によって対応を余儀なくされた事柄ばかりだ。

他方、映像配信にかかる組織的なポータルサイトの開設がおこなわれたり、新たなネットワーク組織が立ち上がったたり、統括団体による政府への条件緩和要請がなされたりと、公演再開と継続に向けた舞台芸術界の動きも様々見て取れる。コロナ禍は、舞台芸術の世界に、結果として大きな構造変化をもたらしていくのかもしれない。そうした視点から、2021年のオペラ界を、時間を追って見ていくことにしよう。

1-2. 2021年1月～3月

1) 実施された公演

年度末にあたる1月～3月は、例年、各団体や劇場が大型公演を企画実施する時期だ。コロナ禍前までは、年明け以降、あちこちで主催公演がおこなわれるのが常だった。2021年も、緊急事態宣言などへの対応に追われながら、その年の焦点となるような公演が、この時期に実施されていった。

日本オペラ振興会の事業部の一つである藤原歌劇団は、2020年の上演予定から延期していた鈴木恵里奈指揮、マルコ・ガンディーニ演出による《フィガロの結婚》を、昭和音楽大学テアトロ・ジージョ・シヨウワで上演した(1月8、9日)。同公演は、2020年6月に日生劇場での実施が予定されていたが中止となり、会場を変更しておこなわれたものだ。

さらに、《ラ・ボエーム》を鈴木恵里奈指揮、岩田達宗演出により、東京文化会館（1月30、31日）と愛知県芸術劇場（2月6日）で実施した。

同じく日本オペラ振興会の事業部の一つである日本オペラ協会は、《キジムナー時を翔ける》を、星出豊指揮、粟國淳の新演出により上演して、作曲家の中村透（1946-2019）を追悼した（2月20、21日）。キジムナーは沖縄諸島に伝わる精霊のこと。中村が長年活動の拠点にしてきた沖縄の歴史風土、そして自然をテーマに創作し、1992年に初演された作品が蘇った。会場には沖縄から来場した人たちもいて、作品上演をつうじて故人を偲んだ。

東京二期会は、マキシム・パスカル指揮で《サムソンとデリラ》をセミ・ステージ形式上演したのを皮切りに、2021年をスタートした（1月5、6日）。パスカルは、スケジュールが合わなくなったジェレミー・ローレルの代役として起用され、さらに8月の《ルル》でも登場している。続いてセバステイアン・ヴァイグレ指揮、キース・ウォーナー演出による《タンホイザー》を、東京文化会館で上演している（2月17、18、20、21日）。同公演には、当初予定のアクセル・コーバーが新規入国者制限のため来日できず、読売日本交響楽団の演奏会のために来日していたヴァイグレが、日本滞在を延長して指揮したという経緯があった。さらにこの時期、本公演に加えて文化庁の「戦略的芸術文化創造推進事業」により、マリウス・フェリックス・ランゲ作曲《雪の女王》を境港市（1月17日）と鳥栖市（1月23日）で上演している。

コロナ禍への対応をおこないながら、**新国立劇場**などの大規模な劇場・音楽堂が着実に上演を重ねたことも心強かった。ダニエレ・カッレガーリ指揮、アントネッロ・マダウ＝ディアツ演出の《トスカ》（1月23、25、28、

31日、2月3日）、沼尻竜典指揮でアンドレアス・ホモキ演出の《フィガロの結婚》（2月7、9、11、14日）、大野和土指揮でゲッツ・フリードリヒ演出の《ワルキューレ》（3月11、14、17、20、23日、うち23日は城谷正博指揮）をそれぞれ上演している。いずれも海外の著名演出家による舞台上演で、同劇場がこれまでも取り上げてきた大規模な舞台の再演である。《トスカ》は、上演直前の同年1月15日に逝去した照明家の奥畑康夫の追悼公演となった。戦後、日本のオペラを牽引してきた中心人物がまた一人、鬼籍に入った。

びわ湖ホールでは、1月にびわ湖ホール声楽アンサンブルの公演として、次期芸術監督の阪哲朗の指揮、中村敬一の演出で《魔笛》を上演した（1月28～31日）。同ホールは、これまで長きにわたり沼尻竜典・現芸術監督の指揮によるワーグナー作品上演に取り組んできた。2021年は、沼尻の指揮で《ローエングリン》をセミ・ステージ形式で上演、もう一つ、そして完結に向けて、その歩みを進めた（3月6、7日）。

北海道二期会が、札幌文化芸術劇場 hitaru（札幌市芸術文化財団）との共同主催で《蝶々夫人》を上演、ライブ配信もおこなった（2月21日）。このほかにもオペラシアターこんにゃく座が、「創立50周年記念公演第1弾」として、林光作曲の《森は生きている》を世田谷パブリックシアター（2月19～24日）、関市文化会館（2月28日）、大野城まどかぴあ（3月14日）、JMSアステールプラザ（3月20日）で上演している。

「都民芸術フェスティバル」は、毎年1月～3月に都内会場で実施される複数の団体公演に対して、東京都が助成をおこなうものだ。1月の東京文化会館での藤原歌劇団による《ラ・ボエーム》、2月の新宿文化センターでの日本オペラ協会の《キジムナー時を翔ける》と東京文化会館での東京二期会による

《タンホイザー》は、この枠組みでの上演である。

2) 中止・延期された公演

公演が開催できたケースが多数あった一方で、2021年も多くの公演で中止・延期の措置がとられている。そのため、今号でも176ページから、発表されていた公演の中止・延期などの対応状況を参照していただけるようにしている。

リストにもあるとおり、各大学の学生による公演をはじめ、子どもの鑑賞教室、巡回公演などが、厳しいコロナ対応に迫られた結果、中止、あるいは非公開での実施などに変更された。

大規模な公演を定期的におこなっている組織の公演では、伊丹市民オペラ《ナブッコ》、藤原歌劇団の兵庫県立芸術文化センターでの《ラ・ボエーム》、小澤征爾音楽塾オペラ・プロジェクトの《ラ・ボエーム》、鹿児島オペラ協会の《ミスター・シンデレラ》、堺シティオペラの《愛の妙薬》などが中止あるいは延期となった。

1-3. 4月～6月

1) 実施された公演

大規模なフェスティバルの中でも、**東京・春・音楽祭**で、多くの変更や中止を余儀なくされながらもオペラ公演や関連企画が2021年に実施されたことは、特に記録しておこう。多くのアーティストを海外から招聘して実施されてきた同音楽祭が、この年、どのように制作されたのか、そのプロセスは、フェスティバル公式ブログ「ふじみダイアリー 今日の日ハルサイ事務局 外国人出演者の入国——コロナ禍の来日実現まで」¹において、詳細

¹ https://www.tokyo-harusai.com/harusai_journal/2021_diary19/（2022年12月1日最終閲覧）

に記録されている。

ブログでも言及されているように、各国政府のコロナ禍対応により海外アーティスト招聘が困難を極めていた。そうした中で、「バブル方式」と呼ばれる手法をとり、リッカルド・ムーティやアカデミー生、そして公演に参加する歌手たちの来日が可能になった。これは、実質的な隔離状態を14日間続けながら、他者との空間的な分離を確保する「バブル」の中での活動のみ許されるという方法である。こうして、4人の若手指揮者（シンガポール、ドイツ/アメリカ、日本 [2名]）が参加してアカデミーが実施され、その様子はオンラインでも公開された。そして発表公演は、日本人歌手たちの出演によりミューザ川崎でおこなわれている（4月20日）。加えてムーティは、来日した歌手3人とともに《マクベス》を演奏会形式で上演、その演奏はコロナ禍の閉そく感を打ち破るかのごとく、オペラの醍醐味を提示して、大いに話題になった（4月19、21日）。このほかにも、カタリーナ・ワーグナーのリモート演出により「子どものためのワーグナー」の企画を実施、今回は《パルジファル》を抜粋上演した（3月27、28、31日、4月3、4日）。

新国立劇場は、4月に入って《夜鳴きうぐいす》と《イオランタ》を新制作した。ところが、この公演に向けて招聘予定だった指揮者と演出家チームは、コロナ禍のために来日できない事態に陥ってしまう。そのため、同公演の指揮者はアンドリー・ユルケヴィチから高関健に交替、演出・美術・衣裳のヤニス・コッコスほかは、リモート演出により対応、海外から招聘予定だったキャストたちも全て日本在住の歌手たちに変更のうえ上演された（4月4、6、8、11日）。リモート演出は他の組織においてもおこなわれて、海外人材による創造活動の解決策の一つとなった。

《ルチア》は、モンテカルロ歌劇場との共同

制作の再演で、スペランツァ・スカップッチが来日して指揮をした(4月18、21、23日)。しかし、同プロダクションの最終公演(4月25日)は、政府から東京・京都・大阪・兵庫に緊急事態宣言が発出された(4月25日～5月11日)のために中止となった。

《ドン・カルロ》は、緊急事態宣言の延長下(5月31日まで)での公演であった。そのため、一部の公演は公演開始時刻を早めるなどの対応策を講じて実施され、主要キャストの変更などの対応にも追われる中での開催となった(5月20、23、26、29日)。招聘歌手が来日を断念したために、ドン・カルロ、エリザベッタ、フィリッポ二世の主要キャスト変更を事前に発表しての実施だった。

日本オペラ振興会は、毎年ゴールデン・ウィークの時期におこなわれる「川崎・しんゆり芸術祭アルテリッカしんゆり」で公演を実施した。今回は《ジャンニ・スキッキ》が藤原歌劇団により、池辺晋一郎作曲《魅惑の美女はデスゴッデス!》が日本オペラ協会により、ダブルビル上演されている(4月24、25日)。いずれの作品も松下京介が指揮、岩田達宗が演出をそれぞれ担当した。さらに、日生劇場の主催公演で、鈴木恵里奈指揮、粟國安彦演出により、《蝶々夫人》を上演した(6月25～27日)。

東京二期会は、3年に1度のサイクルで「二期会ニューウェーブ・オペラ劇場」と題して若手を起用するバロックオペラ公演を実施している。2021年はその年にあたる。2015年、2018年と同企画の指揮をしてきた鈴木秀美により、今回は《セルセ》が取り上げられた(5月22、23日)。自身がダンサーである中村蓉の演出は、躍動感あふれるダンスを繰り広げるダンサーたちで舞台空間を埋め、さらに彼らに絡めて若手歌手たちの身体の可能性を最大限に引き出していく。歌手に要請されるエンターテイナーとしての総合力を、若い歌手た

ちが体得する良い機会になったに違いない。

東京文化会館は、カリア・サーリアホ作曲《Only the Sound Remains—余韻—》を新制作・日本初演した(6月6日)。出演者、指揮者、演出家、美術・照明・衣裳家に加えて、作曲家もこの公演に立ち会うために、主催の東京文化会館のバックアップにも支えられて来日後2週間の隔離をクリア、今回の公演に対して並々ならぬ意欲を見せた。この舞台は、このあとヨーロッパ各地で公演されるなど、日本制作の舞台発信事例となった。

日生劇場は、園田隆一郎指揮、伊香修吾演出による《ラ・ボエーム》の日本語上演を新制作でとりあげた(6月10、11、15、17、18日)。高崎(8月7日)、堺(10月21日)、名古屋(10月28日)での公演とあわせ、「ニッセイ名作シリーズ2021」と題して招待した学校は26校、児童・生徒数は4,964人と発表されている(公式サイトによる²)。加えて、一般の観客が鑑賞できる公演は「NISSAY OPERA 2021」として、同じプロダクションが同劇場で上演され(6月12、13日)、その後、高崎(8月7日、ニッセイ名作シリーズとしても同時開催)、堺(10月23日)、名古屋(10月30日)、盛岡(11月23日)の各地を巡演している。

中小規模会場の公演では、日本橋オペラ研究会によるメサジェ作曲《お菊さん》の日本初演が話題になった。これは、日本橋公会堂での上演である(5月29、30日)。

2) 中止・延期された公演

東京・春・音楽祭の《ラ・トラヴィアータ》、《パルジファル》が中止、新国立劇場の《ルチア》は、先述のとおり、最終日のみ中止となった。第59回大阪国際フェスティバルの

² 「ニッセイ名作シリーズの歴史」 <https://www.nissaytheatre.or.jp/appreciate/history.html> (2022/12/01最終閲覧)

《泥棒かささぎ》も稽古を進めていた中、公演日ギリギリのタイミングで中止が発表されている。毎年多くの公演を実施している日生劇場のシリーズ公演は《ラ・ボエーム》を上演したが、鑑賞教室事業「ニッセイ名作シリーズ2021」のうち、1公演だけ中止の措置がとられている（6月16日）。

6月には、イタリアからパレルモ・マッシモ劇場が招聘公演《ラ・ボエーム》《仮面舞踏会》を各地で実施する予定だったが、来日そのものが中止となった。

各地の市民オペラも、引き続き開催が難しい状況に追い込まれた。東大阪市民オペラが第1回公演として東大阪市文化創造館での《ラ・ボエーム》を予定していたが中止となり、栃木県オペラ協会の《魔笛》は中止、広島オペラアンサンブルの《コシ・ファン・トゥッテ》も6月の公演は延期となっている。

1-4. 7月～9月

1) 実施された公演

7月からは、感染対策に工夫と努力を重ねながら、これまでも増して各組織の総力を挙げた大規模な公演が実施されていく。一方で、コロナ禍の影響が避けられずに、公演を中止するケースもある中で、実施できた公演をあげてみよう。

新国立劇場の《カルメン》は、びわ湖ホールとの提携公演として、大野和土指揮、アレックス・オリエ演出により新制作上演された（7月3、6、8、11、17、19日）。毎夏、新国立劇場でおこなわれる「高校生のためのオペラ鑑賞教室」は、同プロダクションを、キャストを替えて沼尻竜典指揮により上演された（7月9、10、13、14日。15、16日は中止）。この舞台は、びわ湖ホールでも沼尻指揮で上演されている（7月31日、8月1日）。カルメン役は、早逝したロック歌手、エイミー・ワインハウスをイメージしてキャラクター設定さ

れている。舞台装置も、ロックコンサートのライブ会場を想起させるものだし、衣裳もそれなりにパンク。こうなると歌手たちは着こなし、振る舞いも、徹底的に設定に応じたものにならなければならない。読み替え演出は、演じる側にも相応の大胆さが必要となる。

渋谷慶一郎作曲の《Super Angels スーパーエンジェル》も、2020年のオリンピックに向けて新制作されていた作品がようやく世界初演されたものだ（8月21、22日）。オペラハウスで電子的な音響をつかい、オペラ歌手の声や合唱、手話コーラスとも融合させる。その手法に意義を求めるのではなく、それらの行為をつうじて何を表現するのか、その発想に新規性が求められる。

兵庫県立芸術文化センターは、佐渡裕芸術監督の指揮、広渡勲の演出による《メリー・ウイドウ》の舞台を改訂・新制作した（7月16～18、20～22、24、25日）。同公演については、62ページからの兵庫県立芸術文化センターへのインタビューで、制作過程の詳細を記録しているので、参照していただきたい。

東京芸術劇場は、レオナルド・エヴァース作曲、子どものためのオペラ《ゴールド!》を、菅尾友演出・台本日本語翻訳で日本初演した（8月12、13日）。

東京二期会は、この時期に大型の公演を実施した。7月は《ファルスタッフ》をテアトロ・リアル、ベルギー王立モネ劇場、フランス国立ボルドー歌劇場との共同制作により上演した（7月17～19日。16日は公演中止）。レオナルド・シーニ指揮、ロラン・ペリー演出による。8月は《ルル》。2020年7月に上演予定の公演が、コロナ禍のために延期となっていたもので、マキシム・パスカル指揮、カロリーネ・グルーバー演出により新宿文化センターで上演した（8月28、29、31日）。タイトル・ロールの森谷真理の快演に加えて、パスカルの正確な指揮のもとでのオーケス

トラの演奏も評判だった。9月には、ギエドレ・シュレキーテ指揮による宮本亞門演出の《魔笛》を東京文化会館で上演した（9月8、9、11、12日）。この舞台は後述する文化庁の「アートキャラバン事業」によって、複数の地域を巡演している。

2) 中止・延期された公演

新国立劇場の「高校生のためのオペラ鑑賞教室」《カルメン》（7月15、16日が中止）と、東京二期会の《ファルスタッフ》（7月16日が中止）は、一部の公演がキャンセルとなった。さらに、8月4、7日の東京文化会館の《ニュルンベルクのマイスタージンガー》が中止となる。2020年の上演が延期されてから、出演者をはじめとする関係者、観客などが期待していただけに、これらの大規模公演の中止は、一言で言い表せないほどの落胆と諦念、今後の舞台芸術界への不安などが再び高まる要因となった。

同一会場で、ほぼ時期を同じくする計画ながら、主催する組織により、公演開催と中止の判断が分かれたケースもある。

JMS アステールプラザでは、ひろしまオペラルネッサンス事業として、《ドン・ジョヴァンニ》が8月21、22日に上演される予定だった。これは、2020年に予定されていた公演が延期のうえ、あらためて計画されていたものだ。ところが、2021年の同公演も、広島県「新型コロナウイルス感染拡大防止早期集中対策」を踏まえた広島市の主催イベントなどの開催、および広島市所管施設の臨時休館などの方針により、公演中止の判断へと追い込まれた。同ホール主催の翌月の《ヘンゼルとグレーテル》も中止している（9月25日）。

ひろしまオペラルネッサンスは、ひろしまオペラ・音楽推進委員会、広島市、広島市文化財団 アステールプラザが共催する、公的機関のかかわりに強みを持つ。この時は逆に、

行政の関与の強さが公演を中止せざるを得ない理由になってしまった。

一方、同じJMSアステールプラザで、9月11、12日に、広島シティーオペラ第12回公演《トゥーランドット》が開催された。実施にあたり、主催者としての葛藤もあったと聞く。結果として、行政が主催者から外れたものの2回公演が無事に実施されている。同じ時期の同じ会場で、公演延期、公演実施の判断が分かれた事例となった。

1-5. 10月～12月

1) 実施された公演

新国立劇場は、城谷正博指揮、栗國淳演出の新制作舞台《チェネレントラ》で、2021/2022シーズンの幕開けを飾った（10月1、3、6、9、11、13日）。主役はイタリアに拠点を置いて活躍する協団彩。この舞台最大の立役者は、ドン・マニフィコをうたったアレッサンドロ・コルベッリ。ダンディーニ役の上江隼人が健闘していたことも喜ばしい。

そして、《ニュルンベルクのマイスタージンガー》がとうとう上演された（11月18、21、24、28日、12月1日）。ザルツブルク・イースター音楽祭とザクセン州立歌劇場（ドレスデン）、東京文化会館と新国立劇場とで国際共同制作した舞台は、ザルツブルクで2019年4月13日に初演された後、ドレスデンで2020年1月～2月に上演されており、東京での上演は2020年6月に東京オリンピックにあわせて計画されていた。その公演がコロナ禍により延期されただけでなく、2021年8月に東京文化会館で満を持して実施予定だったにもかかわらず、中止となっていたのである。コロナ禍以降、数々の大規模な舞台の中止発表を受けて、ワーグナー作品はしばらく観られないかもしれないという感情すら芽生えていただけに、観客の期待も高まり、それによく応えた恰好だ。イエンス

=ダニエル・ヘルツォークの演出は、新国立劇場の舞台をフルに使い、さらにその幅を越えるほどの広がりを持たせた合唱の配置となった。ソーシャル・ディスタンスの十分な確保など、コロナ禍の最中での上演となったために、当初の想定を超えた要請があったと察する。トーマス・ヨハネス・マイヤーなど来日組に加えて、日本人のソリストたちも参加して各役を演じきったが、中でもベックメッサー役のアドリアン・エレートの歌唱や演技が特に光っていた。

新制作の大型舞台を2つ続けて上演した後、新国立劇場の定番となった栗山民也演出の《蝶々夫人》(12月5、7、10、12日)。主役の中村恵理が堂々たる歌唱で演じきったことが大いに評価される舞台であった。

東京二期会は、毎秋に日生劇場で上演する定番の喜歌劇舞台として、アンドレアス・ホモキ演出の《こうもり》を上演した(11月25～28日)。

この他にも各地の大型公演をとりあげておこう。びわ湖ホールが、《つばめ》を中村恵理主演、園田隆一郎指揮、伊香修吾演出で新制作上演した(10月8～11日)。この他、びわ湖ホール声楽アンサンブルが《泣いた赤鬼》を上演している(滋賀県：八日市文化芸術会館11月14日、びわ湖ホール：11月28日)。

全国共同制作公演は、東京芸術劇場が《夕鶴》を小林沙羅主演、辻博之指揮で上演した(10月30日。このほかの公演は2022年1月30日に刈谷市総合文化センター、2月5日に熊本県立劇場で実施)。注目されたのは、演劇畑の岡田利規が読み替え演出をおこなったこと。主人公を強い意志を持った女性として描き、印象深い舞台となった。

日生劇場が《カプレーティとモンテッキ》を5回上演(11月8、9、11、13、14日)、1回は中止となった(11月12日)。

大分二期会は、創立10周年記念公演とし

て、5月に予定されていた《魔笛》を延期していたが、8月に上演した(8月12、13日)。指揮は森口真司、演出は中村敬一。さらに《カルメン》を、同じく森口真司指揮で、演出は岩田達宗により、iichiko総合文化センターで上演した(10月2、3日)。名古屋二期会が、創立50周年記念として、村上寿昭指揮、伊藤明子演出で《魔笛》を、日本特殊陶業市民会館で上演した(愛知県：10月23、24日)。

2) 中止・延期された公演

10月～12月は、毎年のように大規模な海外歌劇場公演がおこなわれる時期である。2021年も全く来日ができない状況が続き、2021年で最も大きな招聘公演のはずだったウィーン国立歌劇場の引越公演も中止となった。この年はフィリップ・ジョルダン指揮、オットー・シェンク演出の《ばらの騎士》とリッカルド・ムーティ指揮、キアラ・ムーティ演出の《コジ・ファン・トゥッテ》が予定されていた。ハンガリー国立歌劇場《魔笛》の巡回公演も中止となっている。

この他、例年特色のある公演がおこなわれている北とぴあ国際音楽祭での《アルミード》も中止されている(2022年12月に延期のうえ、上演された)。

2. 特徴のある動き

1) 人材育成の機会

劇場、オペラ団体による研修は、若手歌手などを対象に複数の組織で実施されている。

指揮者の育成機会もある。4月に実施された東京・春・音楽祭の「イタリア・オペラ・アカデミー in 東京」vol.2について再度言及しておこう。2021年は、リッカルド・ムーティの指導によって、《マクベス》が取り上げられた。アカデミーのために若手プレーヤー主体に特別に編成された東京春祭オーケストラとイタリア・オペラ・アカデミー合唱団が

共演している。この他に、びわ湖ホールで毎夏継続されている講座がある。2021年も「沼尻竜典オペラ指揮者セミナーⅦ～『カルメン』指揮法～」が開催された。その成果発表として、5名のセミナー受講生による抜粋上演がおこなわれた（8月12日）。

新国立劇場オペラ研修所修了公演として、第21期生～第23期生により、チマローザの《悩める劇場支配人》を取り上げた（中劇場、3月5～7日）。加えて、第22期生～第24期生による試演会として、《ジャンニ・スキッキ》を小劇場で公演している（7月31日、8月1日）。

足利市民会館の専属団体である足利オペラ・リリカの修了公演では、《電話》全曲のほか、いくつかの作品が抜粋で取り上げられた（栃木県：3月17日）。名古屋二期会の研修所であるコンセルヴァトリーオ名古屋二期会は《コジ・ファン・トゥッテ》修了公演を実施した（抜粋、3月30日）。

各芸術系大学の発表公演は、2021年も実施・中止の判断が分かれた。東京藝術大学は《魔笛》を奏楽堂で上演した（10月9、10日）。国立音楽大学は《コジ・ファン・トゥッテ》を実施している（10月16、17日）。愛知県立芸術大学は《イドメネオ》を上演（大学単独主催で12月11、12日長久手市公演。5日は知立市で公演）、お茶の水女子大学は《オルフェオとエウリディーチェ》を実施した（12月26日）。

将来の鑑賞者育成の機会も再開している。再掲になるが、日生劇場が中学生・高校生を招待して鑑賞機会を設定する「ニッセイ名作シリーズ」、および一般公演である「NISSAY OPERA」では《ラ・ボエーム》が実施された（6月、劇場外巡回公演は11月まで）。《カプレーティとモンテッキ》も「ニッセイ名作シリーズ」で実施され（11月8、9、11日）、一般向けには「NISSAY OPERA」として同

じプロダクションが上演された（11月13、14日）。

新国立劇場の「高校生のためのオペラ鑑賞教室」は毎年7月におこなわれている。2020年は中止になったが、2021年は読み替え演出による《カルメン》を上演した（東京都：7月9、10、13、14日）。関西での10月公演は、ステファノ・ヴィツィオーリ演出の《ドン・パスクワレ》が阪哲朗の指揮で再演されている（10月26、27日）。こうしたオペラ劇場で鑑賞した舞台が身体に記憶され、将来の観客につながる芽が着実に育まれていくことを期待したい。

文化庁の新進芸術家海外研修制度は、1年研修に歌手3名、2年に歌手1名がそれぞれイタリア、ドイツ、オランダに派遣されたが、例年よりもその数は少なくなっている。

コレペティートルは、オペラ制作には不可欠の役割である。五島記念文化賞オペラ新人賞の研修成果発表として、ドイツでコレペティートル研修を受けて帰国した原田太郎の指揮で《ヘンゼルとグレーテル》が実施されている（セミオペラ形式、東京都：9月19日）。

2) 海外招聘公演

海外招聘公演は、前年に引き続き、大規模な劇場や音楽祭がまったく来日できない状況で、予定されていたパレルモ・マッシモ劇場、ウィーン国立歌劇場、ハンガリー国立歌劇場の招聘公演はキャンセルとなった。2021年は、唯一フランスから来日したアンサンブルKが、《シャルリー～茶色の朝》を上演。主催の神奈川県立音楽堂での公演だった（10月30、31日）。

こうして、これまで盛んにおこなわれてきた劇場や音楽祭を招聘するという事業形態に空白期間が生まれている。招聘公演にかかわることで、音楽スタッフや技術スタッフをは

じめとする人材が育ってきた日本において、このことが今後どのような影響を及ぼすことになるのだろうか。

3) 市民オペラの活動

市民オペラ、県民オペラなど、一般市民が参加しておこなわれる活動は、コロナ禍の直撃を受けている。集まらないために練習ができないなどの理由で、活動継続が困難になったのだ。そうした状況下でありながらも、活動を再開した組織がいくつもある。大規模な会場で活動した組織をあげてみよう。

鹿児島オペラ協会は、《フィガロの結婚》を宝山ホールで上演（鹿児島県：3月4日）、杉並区民オペラは、《椿姫》を杉並公会堂で（東京都：7月24、25日）、宮崎県オペラ協会は、佐橋俊彦作曲《赤毛のアン》を都城市総合文化ホール（宮崎県：7月25日）と宮崎市民文化ホール（8月1日）で再演、相模原シティオペラは、《シンデレラ》を相模原市民会館（神奈川県：7月31日、8月1日）で、小田原オペラが、《魔笛》を松田町生涯学習センター（神奈川県：8月29日）で上演、新宿区民オペラは、《イル・トロヴァトーレ》を新宿文化センター（東京都：9月4、5日）で、函館オペラの会は、《愛の妙薬》を函館市民会館（北海道：11月14日）、上田市民オペラ実行委員会は、《魔笛》をサントミューゼ（長野県：11月14日）で上演した。和歌山市民オペラ協会は、山下祐加作曲《稲むらの火の物語—梧陵と海舟》を新作初演（11月14日）、同年10月29日に開場したばかりの和歌山城ホールが会場となった。これは「紀の国わかやま文化祭2021 第36回国民文化祭・わかやま2021 第21回全国障害者芸術・文化祭わかやま大会」としての上演であり、さらに和歌山市民オペラ協会第25回記念定期公演でもあった。大規模舞台を継続してきたオペラ彩は、和光市民文化センター（埼玉県：12月18、19日）

で《カルメン》を上演している。このように、確実に各地の市民オペラ活動が再開傾向にあるのだが、聞こえてくるのはコロナ禍によるブランク、団員の確保など、継続を妨げる要因への対応と難しさである。アマチュアが主体の公演活動ならではのことであろう。

とはいえ、演奏会形式、抜粋上演なども含めると、立川市民オペラの会、姫路シティオペラ、稲城市民オペラ、弘前オペラなど、各地の市民オペラ活動が確実に実施されていることがわかる。アマチュアの合唱団やオーケストラなどは、稽古のために団員が集まることや、練習会場の確保もままならない中で、関係者の活動への想いが一つひとつの公演活動につながっている。

4) 演奏会形式など

指揮者の飯守泰次郎は、ワーグナー作品に、長年取り組んできた。2021年は、東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団と「ニーベルングの指環」（抜粋）をとりあげた（5月16日）。宮崎県立芸術劇場は、《トゥーランドット》を「国文祭・芸文祭みやざき2020 フォーカスプログラム 第26回宮崎国際音楽祭」として実施した（8月15日）。サントリーホールは、「サマーフェスティバル2021」で、細川俊夫作曲《二人静～海から来た少女～》をアンサンブル・アンテルコンタンポランの演奏で日本初演した（8月22日）。

3. オペラ制作を取り巻く環境の変化

3-1. コロナ禍での新たな支援の動き

1) 「大規模かつ質の高い文化芸術活動を核としたアートキャラバン事業」が動き始める

大規模な公演の中には、これまでとは異なる動きを見せた活動がある。

コロナ禍を乗り越えるため、各芸術文化分野の統括団体をつうじて事業助成がおこなわれたのが、文化庁「大規模かつ質の高い文化

芸術活動を核としたアートキャラバン事業」だ。令和2年度の補正予算による。同事業は、「大規模で質の高い我が国の文化芸術水準を向上させるような公演等を支援し、文化芸術の質の向上と文化芸術の重要性や魅力を発信することにより、新型コロナウイルスの感染拡大による萎縮効果を乗り越え、文化芸術に対する需要喚起や業界全体の活性化を図る」³ことを目的に実施されたものだ。

コロナ禍で活動が制限される中で、各地域での鑑賞機会を確保するために、統括団体への助成をつうじて芸術団体の活動の継続を促そうとするものだった。このうち、オペラに関しては、大規模な公演事業を継続しておこなってきた団体が集まり、オペラキャラバン・ジャパン実行委員会を立ち上げて、各団体との共催事業を標記の助成枠で計画した。各地域での大規模会場公演をまとめてみよう。

藤原歌劇団は、日生劇場で公演したばかりの《蝶々夫人》を、鈴木恵里奈の指揮により、アクトシティ浜松（静岡県：7月10日）と高知県立県民文化ホール（8月7日）で、さらに松下京介指揮で、下関市民会館（山口県：10月29日）で上演した。浜松公演での熱心な観客たちの様子からは、コロナ禍での断絶を経て本格上演が開催されたことへの感動が感じられた。加えて、グランドオペラ公演の鑑賞機会がなかなか得られなかった地域で、本格的なオペラを上演する意義と効果とを実感する結果となった。

東京二期会は、9月に東京文化会館で公演したばかりの《魔笛》を、やまぎん県民ホール（山形県：10月9日）、高崎芸術劇場（群馬県：10月14日）と札幌文化芸術劇場 hitaru

（11月6日）で上演している。

関西二期会 / 関西歌劇団は、9月に関西歌劇団が本公演でとりあげた《アドリアーナ・ルクヴルール》を一宮市民会館（愛知県：10月8日）、周南市文化会館（山口県：10月13日）、岡谷市文化会館（長野県：12月24日）の各地で上演した。

日本劇団協議会は、同事業の中で、全国118地域に19作品324公演を届ける演劇アートキャラバン事業「巡演ネットワーク活性化推進プロジェクト—演劇を迎える喜びに支えられて—」を実施した。オペラシアターこんにゃく座は、同枠において、《イヌの仇討あるいは吉良の決断》を、紀の川市粉河ふるさとセンター（和歌山県：10月20日）、阪南市立文化センター（大阪府：10月21日）、神戸市文化ホール（兵庫県：10月22、23日）、京都府立文化芸術会館ホール（10月24、25日）、ひこね市文化プラザ（滋賀県：10月26日）、やまと郡山城ホール（奈良県：10月28、29日）で上演している。

同事業では、他にもオーケストラやクラシック音楽事業者、公立文化施設などの統括団体が各地で大規模な公演を展開して、パンデミックで止まってしまった舞台芸術活動や各地の劇場、音楽堂の盛り上げに努めた。

2) 令和2年度第3次補正予算文化庁 ARTS for the future!

「ARTS for the future!」は、2021年1月8日から2021年12月31日までに実施される活動を対象に、1団体あたり補助上限区分に応じて最大600万円～2,500万円が補助されるものである。この事業に対して11,200件の応募があったことが発表された⁴。緊急支援策

³ 文化庁ウェブサイトの同事業の目的より。
https://www.bunka.go.jp/shinsei_boshu/kobo/92908201.html（2022年12月1日最終閲覧）

⁴ 文化庁ウェブサイトの同事業の実績より。
https://www.bunka.go.jp/shinsei_boshu/kobo/20210326_01.html（2022年12月1日最終閲覧）

で、さらに多数の応募数だったことから、手続きには課題があるとされたものの、審査・交付までの時間短縮に努めて配分されていた。

3) 経済産業省令和2年度補正予算「コンテンツグローバル需要創出促進事業費補助金（J-LODlive、J-LODlive2）」

舞台上演を収録して配信する事業に対して、経済産業省から「コンテンツグローバル需要創出促進事業費補助金（J-LODlive 補助金）」が配分された。高額の補助となったこともあり、これを契機に数多くの舞台が配信企画された。観客の立場で言えば、コロナ禍にありながら、また離れた地域の舞台上演鑑賞が可能になった点がメリットだった。一方で、舞台上演の演出に加えて、映像のディレクションも極めて重要であることが顕在化したとも言える。舞台上演のみならず、映像の質の確保は今後の課題ともなる。

3-2. 例年どおりの助成事業 （オペラ団体への助成）

文化庁・文化芸術振興費補助金「舞台芸術創造活動活性化事業」では、日本芸術文化振興会を通じて、オペラ団体に対する助成がおこなわれている。このうち、「複数年計画支援（2020年度～）」を受けたのは、東京二期会、日本オペラ振興会である。同枠で採択された団体は、基本的に3年間は一定規模の助成額が確保され、複数の事業を実施できる。これにより、安定した公演計画が可能となることが特徴だ。一方「公演事業支援」枠は、単年度で事業ごとの採択となっており、びわ湖ホール声楽アンサンブル《魔笛》《つばめ》、関西歌劇団《アドリアーナ・ルクヴール》、名古屋二期会《魔笛》、関西二期会《オテッロ》などが実施された。

日本芸術文化振興会の**芸術文化振興基金助**

成事業のうち、「現代舞台芸術創造普及活動」で、複数の公演が実施されている。札幌文化芸術劇場 hitaru（札幌市芸術文化財団）/北海道二期会による《蝶々夫人》、ニッセイ文化振興財団《ラ・ボエーム》《カプレーティとモンテッキ》、仙台オペラ協会《魔笛》、オペラ彩《カルメン》などが採択された。池辺晋一郎作曲《千姫》の世界初演は、姫路市文化コンベンションセンター（アクリエひめじ）のオープニングシリーズの一環として実施された。このほか「アマチュア等の文化団体活動」枠で助成を受けた団体の公演もあった。弘前オペラの《魔笛》演奏会形式は同枠での助成である。

上記は、日本芸術文化振興会から、各団体に配分された助成金であるが、加えて文化庁の各事業から、オペラ公演に対して実施されたものをまとめてみよう。

「戦略的芸術文化創造推進事業」では、2020年の予定から延期されていた公演が実現した。新国立劇場の《ニュルンベルクのマイスタージンガー》、東京二期会の《ファルスタッフ》《ルル》はこの枠組みだった。東京二期会は、令和2年度の同事業で《雪の女王》を2か所で上演している。さらに令和2年度の同事業で、日本芸能実演家団体協議会が「JAPAN LIVE YELL project」を実施、《ヘンゼルとグレーテル》が熊本城ホールでおこなわれた（2月23日）。

このほかに、「文化芸術による子供育成総合事業一巡回公演事業一」では、複数の団体による事業が、〈音楽劇公演〉〈児童劇公演〉〈合唱公演〉〈ミュージカル公演〉などの分野で採択されている。東京合唱協会、ミラマーレ・オペラ、オペラアーツ振興財団、オペレッタ劇団ともしび、オペラシアターこんにゃく座、藤原歌劇団、堺シティオペラ、東京二期会合唱団により、全国の小・中学校体育館などで巡回公演がおこなわれた。同様の

巡回公演は令和2年度第3次補正予算により「**子供のための文化芸術鑑賞・体験支援事業**」としても実施された。

(劇場・音楽堂等への助成)

文化庁・文化芸術振興費補助金「**劇場・音楽堂等機能強化推進事業**」は、日本芸術文化振興会を通じて、各地域の中核となる各館の主催事業に対して配分されている。この事業には、4つの枠組みが設けられており、オペラ公演も採択されている。そのうち、**[劇場・音楽堂等機能強化総合支援事業]** **[地域の中核劇場・音楽堂等活性化事業]**の各事業を活用して、びわ湖ホール、兵庫県立芸術文化センター、神奈川県立音楽堂などが公演を実施した。加えて、**[共同制作支援事業]**では、「全国共同制作オペラ 東京芸術劇場シアターオペラ vol.15」《夕鶴》が上演された。日生劇場の《ラ・ボエーム》は、自らの劇場での公演事業に加えておこなった劇場外巡回公演には、**[劇場・音楽堂等間ネットワーク強化事業]**を活用している。

他にも、文化庁の助成事業が複数おこなわれており、「**次代の文化を創造する新進芸術家育成事業**」では、新国立劇場オペラ研修所が令和2年度に《悩める劇場支配人》、令和3年度は《ジャンニ・スキッキ》を上演している。「**大学における文化芸術推進事業**」では、昭和音楽大学が《コジ・ファン・トゥッテ》を上演予定だったが、コロナ禍のために十分な稽古時間を確保できなかったため、映像作品を製作して配信した。

このほか、日本芸術文化振興会の「**芸術文化振興基金助成事業**」のうち、「**地域文化施設公演・展示活動：文化会館公演**」は、地方自治体などが設置した文化会館などの活動に活用されている。みつなかホールの開館25周年記念事業「第30回みつなかオペラ」では、《ドン・ジョヴァンニ》が上演された。

3-3. コロナ禍での動き～新たな創作の潮流

1) 新作初演

サーリアホ作曲《**Only the Sound Remains 一余韻一**》は日本初演、東京文化会館による新制作舞台だった。その後、ヨーロッパでの公演をおこない、日本発信の舞台となった。

新国立劇場の新作委嘱となった渋谷慶一郎作曲《**Super Angels スーパーエンジェル**》のほか、西下航平作曲《**幕臣 渋沢平九郎**》、八木幸三作曲《**ノンノ**》、和歌山城ホールの開場記念公演として上演された山下祐加作曲《**稲むらの火の物語一梧陵と海舟**》、アクリエひめじ開場公演となった池辺晋一郎作曲《**千姫**》などが大規模な会場で新作初演されている。

中小規模会場では、メサジェ作曲《**お菊さん**》の日本初演などが話題だった。

演奏会形式では、細川俊夫作曲《**二人静～海から来た少女～**》が、サントリーホールで初演、竹内一樹作曲、宇吹萌台本による《**25時58分、青山一丁目交差点**》が、かん芸館で新作初演されている。

2) デジタルコンテンツとしての展開

インターネットが、日々刻々、舞台芸術のあり方を大きく変化させている。インターネットは、公演情報を広く拡散する広報への活用のみならず、上演成果をコンテンツとして発信するツールとなった。加えて、バーチャル空間と、舞台での実演とを融合して、一つの作品を構成する新たな創造フェーズへの遷移も見られる。舞台にプロジェクション・マッピングを取り入れたり、背景に映像を組み込んで大道具の代替にしたりするなどの手法にとどまるものではない。Virtual Reality (VR)、Augmented Reality (AR)では、仮想空間に入り込んだり、仮想と現実とを重ね合わせたりする手法で、あらたな舞台空間を構成していく。舞台上演を配信する活動に対する国の緊急支援策なども、こうし

た動きを加速させた。ここで、デジタルコンテンツとして舞台製作を実施した事例を紹介しよう。

秋に各大学でおこなわれるオペラ公演は、例年夏休みから9月にかけて舞台稽古などを重ねる。2021年は、その期間にコロナウイルスが爆発的に広がって、まったく稽古ができなくなった。昭和音楽大学は、まさにその状況に置かれていた。毎年イタリアから招聘して指導を受けている指揮のニコラ・パスコフスキ、演出のマルコ・ガンディーニ、舞台美術のイタロ・グラッシ、衣裳のアンナ・ピアジョッティのイタリア人チームが来日できなくなっていたのだ。

そうした中、上演予定だった《コジ・ファン・トゥッテ》が、2021年10月25日に開催されるオペラ・ヨーロッパによる「ワールド・オペラ・デー」に映像招待されていたこともあり、映像製作へと急遽方針を転換したのである。制作チームによる舞台は、2016年に制作上演された舞台をベースに、3DCGを活用してバーチャルで再構成したものだ⁵。

映像製作は、すべてリモートで収録作業が進められた。ソリスト（学生や卒業生たち）は、グリーンバック（画像合成のために設置する緑色の背景幕）の前で個別に演技して撮影していく。さらにソリストの歌唱、合唱やオーケストラの学生たちは、集まって声を合わせたり、合奏したりするのではなく、一人ひとり個別に録音・録画したものを日本側で用意した。これらの映像と音源とをイタリアでミックスして、重唱や合唱の場面を作品に仕上げていった。メイキング映像は、国際的な劇場・音楽祭の組織オペラ・ヨーロッパが

運営する映像サイト「オペラ・ビジョン」で公開されている⁶。作品の一部を編集して完成させた映像は現在もアクセス可能で、VRによるオペラ公演が日本から世界に配信されることになったのである。



デジタル製作の成果となった映像
(昭和音楽大学《コジ・ファン・トゥッテ》、演出：M.ガンディーニ)
提供：昭和音楽大学

4. 2021年の日本のオペラ

1) 「新型コロナウイルス感染症がオペラ公演活動に与えた影響に関するアンケート」の結果より

2020年同様に、オペラ研究所では、毎年の公演実施に関する調査項目に加えて、各団体、劇場に対して標記アンケートを実施した⁷。制作現場での対応を記録するために、その数字やコメントを以下にまとめておこう。

「2021年1月以降に新型コロナウイルス感染症拡大により、貴団体が関わるオペラ公演に影響はありましたか？」という問いに対しては、「影響あり」が56%（回答126）を占めた。「影響あり」の回答のうち、「公演中止」が16%（回答36）、「公演延期」が19%（回答43）、「公演内容変更」が21%（回答47）となった（複数選択可）。

具体的な影響に関する記述は、以下のよう
な言及が目立った（回答からの一部抜粋）。

⁶ 「How Showa University of Music creates new visual operatic works (documentary)」
<https://youtu.be/ybgiphoOdgo>（2022/12/01
最終閲覧）

⁷ 2022年2月～11月にかけて実施、202件の回答が得られた。

⁵ 「World Opera Day - A New Visual Operatic Work 2021 Così fan tutte」
https://www.youtube.com/playlist?list=PLGcJCJVQ6gVe_iKemMZGUvg9KUI1gBJU1s（2022/12/01
最終閲覧）

〈稽古など〉

「緊急事態宣言発令にともなう休館」「まん延防止等重点阻止の適用を理由とする開催自粛」「稽古及び本番が実施できなくなった」「ソーシャル・ディスタンスを保ちながらの稽古実施が難しい」「練習をリモートでおこなった」「練習会場である会館の時間短縮などの影響で稽古の進捗が間に合わない」「多人数で集まって歌唱を伴う練習が困難」「練習時間が一度に確保できず、練習回数を増やしたため、制作費用がかさんだ」「オーディションもできなかった」

〈出演者・プログラム変更など〉

「キャストを変更した」「子ども合唱の練習ができずにプログラムを変更した」「感染対策をしたため演出を変更した」「延期公演のためキャスト変更が多々あり、確保に苦労した」「オーケストラ、合唱をあきらめ、ソリストとピアノ伴奏に変更して開催した」「演奏会形式に変更した」

〈延期・中止など〉

「2020年の公演予定を2021年に延期した」「2021年に実施予定だったが、緊急事態宣言発令期間中となったため、2022年に延期した」「オペラ団体と呼ぶことができなかった。呼べたとしても、待機期間の滞在費が莫大なものとなり実現できない」

〈来場者など〉

「来場予定のお客様から怖くて行けないという声があった」「客席の制限」「収容人数制限」「チケット販売、宣伝も思うようにできなかった」「教育プログラムのため、参加生徒の感染防止を最優先して公演中止にした」

〈入国関連〉

「入国制限」「海外から招聘予定の出演者が入国に必要な隔離期間等に対応できない」「イタリアから演出家等を招聘する予定だったが、国内（アーティスト）での編成とした」

〈配信など〉

「撮影・配信をおこなった」「ライブ配信・アーカイブ配信をおこなった」

上記から、現場での対応の状況が読み取れる。さらに、配信状況の詳細を尋ねた結果、以下のような数字が集まった。

映像配信実施の有無と有料・無料について（有効回答208）

映像配信は54%（回答109）が利用したとしており、そのうち「有料のみ」は15%（回答15）、「無料のみ」は52%（回答57）、「有料・無料のどちらも」が33%（回答36）だった。

配信内容は「オペラ公演全編」が23%（回答29）、「オペラ公演の一部」が18%（回答22）、「オペラ公演とは別内容」58%（コンサート、インタビュー等、回答72）、「講座、講演会」が1%（回答2）となっている。

配信のきっかけについては「中止・無観客公演の代替として」が34%（回答50）、「演奏機会の確保」が25%（回答37）、「その他」19%（回答28）となったほか、「補助金を利用できるため」20%（回答29）、「クラウドファンディング等資金獲得の手段として」2%（回答3）など、外部資金獲得の手段となったケースが目立つ結果となった。

さらに、配信のプラットフォームは、YouTubeが87件と圧倒的であり、次にVimeoが16件、streaming+、ニコニコ動画、Facebook（以上各4件）、カーテンコール、Zaiko（以上各3件）などの回答が寄せられている。

こうして、2020年に続いて、2021年においても、現場の混乱、対応への工夫などが浮かび上がる結果となった。

2) 何が失われ、何に気づかされたのか

何が失われたのか。

文化庁「文化芸術による子供育成総合事業—巡回公演事業—」を例にとってみよう。前掲のアンケートに記載があるように、関係者の努力により小学校体育館などでの巡回公演が開催されたケースが多数あるものの、受け入れ先となる各学校で、保護者のコンセンサスが得られないなどの事情から中止となった公演も少なくなかった。

これによって、歌手をはじめとするアーティストやスタッフが上演の場を失ったのみならず、子どもたちも鑑賞機会を奪われた。これは42ページからのインタビューで岩田達宗も指摘している点だ。パンデミックによる混乱と喪失が、未来の鑑賞者あるいはアーティストの卵たちを実際の舞台から遠ざけている。子どもたちの置かれたこのような状況が、とりわけ今後のオペラ界に直接の影響を与えることにならないように願うばかりである。

さらに、アーティストなど個々の招聘のみならず歌劇場や音楽祭の引越公演が全く実施されない状況が続いている。また、多くの公演が中止となったことで、技術者たちやハコとしての劇場、音楽堂等、オペラ団体が事業

機会を失った。結果として就業継続が難しくなった場合には、創造活動から離脱せざるを得なくなる。こうした危機は個人だけではなく、芸術団体や劇場などにおいても同様に訪れており、この状況が続くと技術の継承などにも課題が出てくることは必至だろう。

そして、我々は何に気づかされたのか。

招聘歌手や指揮者など、海外人材による舞台創造の機会が激減したことで、専ら国内人材による創造活動がおこなわれたために、一部の国内アーティストはコロナ禍前よりも忙しくなったともされる。国内の優れたアーティストたちが活動の機会を待っている。そのことに気づくことができたと言えるかもしれない。

また、舞台芸術が社会においてどのような意味を持ちうるのか、説明する機会も増加した。入国に関する制限撤廃のために意義を訴え、個人事業主であるアーティストたちが上演機会創出について、行政や納税者に対して言葉で伝える必要も出てきている。

そうした時に説得力のある言葉をもって、意義を説いていかなければならない。そのため理論武装が必要となったことを、緊急事態の対応の中で、あらためて認識することになったのである。